

# 学生パワーが 地域を変える

徳島大学の地域貢献

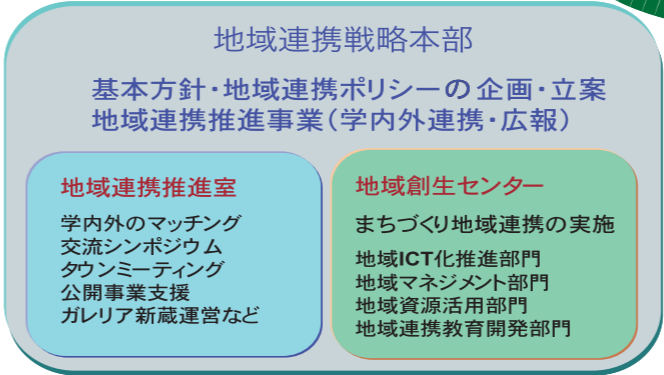
地域連携推進室

山中英生

地域貢献とは

徳島大学は教育、研究、社会貢献を理念の3つの柱としています。地域貢献は社会貢献の一つとして、本学がある徳島という地域において、知的ネットワークの拠点として地域発展に寄与することを目標としています。

【図1】



ただし、貢献といっても、先生や学生が奉仕やボランティアをすることではなく、大学のもつ人材、知識などの知的な資源を地域の課題解決に活かすことが、大学にとって「教育や研究を社会化する」、すなわち「社会に役立つ」ものとする活動につながるよう、大学と地域社会が協調して発展を目指すことが重要です。そのため、地域の様々な主

体との「連携」が重要となります。

徳島大学の地域連携組織

本学では、第一期中期目標・中期計画期間の平成22年度より全学的に地域連携を迅速に進めるため、地域連携戦略本部を組織しました。(図一)戦略本部では上記の視点にたつて地域連携の基本方針や企画・立案を進めています。

地域連携推進室

地域連携推進室は地域の自治体や市民の抱える課題と大学のもつシーズとをつなげる「マッチング」を主たる活動としています。そのため、6年前の発足から大学の持つシーズを発信するシンポジウム、タウンミーティングの開催などの活動を継続しています。また、研究や地域連携の情報を発信する公開事業への支援や、ガレリア新蔵を活用したイベントへの支援、など多様な学内の連携事業を広範に支援する活動をしています。

地域創生センター

また、地域創生センターでは、センターに属する教員グループによって、重点的、具体的な地域づくり活動が進められています。iPhoneアプリ開発、新町エリアのまちづくり、福祉活動、那賀町、上勝町での地域再生人材育成

などで様々な成果を上げています。こうした活動には多くの学生が関わっています。

学びの場新たな知の形成へ

上記の活動などに、ゼミや研究室、クラブ活動、地域活動への自主的参加など多様なチャネルから学生が参画しています。学生さんらにとつても、興味や楽しみを満たすだけでなく、多彩な人々とのネットワークづくりや、社会で必要となる能力(コンピテンシー)を形づくることに役立つ活動となることが期待されています。

さらに、こうした地域連携活動から、全国、あるいは世界にも通用する先進的なモデルが生まれ、新しい知や人材の創造へとつながることを目指しています。

地域創生センター

地域貢献する学生アプリ開発プロジェクト make.a.p.p

吉田敦也

地域創生センター長  
make.a.p.p(メイクアップ)は徳島大学iPhoneアプリ開発プロジェクトです。スマート

フォンと呼ばれる携帯端末iPhoneのアプリ開発を学生中心に行っており、2009年4月に発足しました。地域創生センターと大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部の教員が、アツプルジャパン、ソフトバンクモバイルなどの連携のもと、共同運営しています。

事の起こりは、2009年2月5日、シンガポールの9歳少年が「落書き」というiPhoneアプリを開発/公開したところ2週間で4000回を超えるダウンロードを記録したというニュースが配信されたことでした。

この直前、総合科学部と連携して、モバイル・インターネット時代をリードする人材育成プログラムとしてiPhoneアプリ開発の導入を進めつつあったので、「これだ!」とすぐさまスタートさせました。

徳大生ならもっとスゴイことができる。地域活性化のキラーアプリ開発、それが一夜にして世界に名をはせる徳大ブランドをつくる。世界相手のビジネスモデル開発やソフトウェア研究の萌芽ともなるだろう、そんな夢を描いたのです。

まだまだこれからですが、学生諸君(約15名)は、実に楽しそつにコンピュータ言語を勉強し、教えます。これが財政学研究室の地域貢献です。

合っています。商品として通用するアプリとは何かを議論し、地域課題解決に役立つ機能の設計とアプリ化に寝るのを忘れて取り組んでいます。

すでに約20のアプリが開発・公開され、無料アプリ部門で一位を獲得したり、月間10万ダウンロードを記録する快挙を成し遂げています。

実績が評価され、平成21年度は、国立教育政策研究所との連携で「学校支援地域コーディネーター」アプリの開発、内閣官房「地方の元気再生事業」で商店街活性化アプリの開発を担当しました。平成22年度は、NPO徳島インターネット市民塾「ICTふるさと元気事業(総務省)」との連携で高齢者見守りアプリ「とくったー」を開発、高知県NPOからの委託事業では、災害時トイレマップ、地域が作るお遍路ガイド、入園者による県立牧野植物園ガイドなどのアプリを開発しました。

こうしたmake.a.p.pの活躍の様子はNHK全国ニュース「おはよう日本」で2度にわたつて紹介されました。社会からの注目度の高さを実感しています。勉学に励み、技術を磨く徳大生の力が地域づくりに不可欠なものとなっています。社会からの期待に応えられるよう、また、地域と大学を



しっかりと結びプロジェクトとして、ますます活発に活動し、発展させていきたいと考えています。

総合科学部

財政分析プロジェクト With東みよし町

総合科学部社会創生学科公共政策コース財政学研究室准教授

石田和之

「財政学研究室の紹介」

財政学研究室には、学部生から大学院生まで合わせて合計15名の学生がいます。中には中国やクウェートからの留学生もいます。いろんなところから集まった学生たちが、財政学の研究に取り組ん

ています。

財政学は、国や県、市町村のお金の流れを研究する学問です。なぜ税金があるのか?年金や医療を支えるための財源はどこやって賄うの?がいいか?自治体の借金は大丈夫なのか?こんなことを統計資料を使って研究しています。

東みよし町との共同プロジェクト

東みよし町は、徳島県の西部にある人口1万5千人の町です。四国のほぼ真ん中にあります。町の中央には吉野川が流れています。「加茂の大クス」は町のシンボルで、夏には大クス祭りが開催されます。とくに餅投げは好評です。

東みよし町との「財政分析プロジェクト」は平成20年の夏から始まりました。学生たちが町の財政を分析し、改革案を提案します。平成21年の冬には、学生の提案が予算化され、吉野川ハイウェイオアシスでLEDを使ったイルミネーションを飾りました。平成22年1月には、「地域政策研究賞学生奨励賞(法政大学地域政策研究センター)」を受賞しました。平成22年5月には、「東みよしの借金の話」という冊子を作成し町内全戸に配布しました。

真の狙いは教育

このプロジェクトは、「大学生の地域貢献」としてNHKや徳島新聞など地元のマスメディアに取り上げられました。確かに「大学の研究資源を地域社会で活用する」ことを掲げており、地域貢献のように見えます。しかし、本当は違います。私は、「地域貢献特集として財政学研究室の取り組みを紹介してほしい」と依頼され、この原稿を書きました。にも関わらず、実は地域貢献ではないというのが申し訳ない限りです。しかし、本当のところをお伝えするのがいいと思います。真の狙いは、地域貢献ではなく、学生の教育です。生の財政データに触れ、事業が予算化されるプロセスに実際に関わり、行財政を改革する方法を役場の担当者と議論する、という経験は財政学を理解するうえでとても有効です。東みよし町役場には学生の教育に協力してもらっているのです。学生を地域に育ててもらっているのです。東みよし町役場の職員は、それを承知で協力してくれています(ありがとうございます)。

地域貢献はそんなに簡単なことではありません。学生たちの能力も不十分です。役場の協力を得て、地域の応援をもらつて、学生たちは少しずつ能力を高めます。その結果が、たまた、地域に喜んでもらえるような成果になることがあり



① 町民突撃インタビューの様子  
② 東みよし町視察の様子  
③ 吉野川ハイウェイオアシスのイルミネーション  
④ 川原東みよし町長に報告書を渡すところ  
⑤ 地域政策研究賞を受賞したときの朝日新聞記事



②



④



⑤

## 医学部

### 徳島が好き

「阿波の医療は任せとけ」

大学院ヘルスバイオサイエンス  
研究部総合診療医学分野  
特任教授

### 谷憲治

「夢は地域の総合医」 阿波の医療は任せとけ」 ヤットサー、ヤットサー」

平成22年夏、徳島大学医学生によるサークル「地域医療研究会」のメンバーは、阿波踊り連「地医輝連（ちいきれん）」を結成し、この掛け声を元氣いっぱい響かせながら藍場浜や市役所前演舞場を踊り抜けました（写真①）。本番の10カ月前から有名連である蜂須賀連との交渉を開始し、練習にも参加させてもらいながら準備を進めてまいりました。みんなでアイデアを出し合ったオリジナルの浴衣には徳島の地域をイメージした眉山、吉野川、鳴門の渦潮を描きました。

平成19年10月に結成された「地域医療研究会」には平成22年11月現在医学科1年生から6年生まで92名が在籍しています。徳島の地域医療に貢献しているサークルOBも出てきています。彼らは月

に一度のペースで徳島県内のさまざまな医療施設を視察するなどの活動に取り組んでいます（写真②）、将来必ずしもへき地を含めた地域の医療現場で働くということを決めている訳ではありません。ただ、地域医療に関心を持ち、医学生のうち医療の広い世界を見ておきたいという気持ちは共通しています。彼らは、神山町のスタヂヤを体験したり（写真③④）、牟岐の民宿に泊まって海賊焼きを味わったり（写真⑤）、といった医療以外の活動も積極的に行っていきます。このような活動を通して、地域医療は地方にも都市部にも存在すること、そして海部には海部に、那賀町には那賀町に根付いた地域医療があるということを少しずつ理解してきているようです。こういった医学生たちの活動は、自身の徳島県への親しみを深めるだけでなく、若いエネルギーを備えた彼らが地域に入っていくことによって地域の活性化にもつながっていくのではないかと期待しています。

徳島大学では平成20年度より医学科5年生からの臨床実習に地域医療実習が取り入れられました。彼らは徳島大学のキャンパスを出て、西部は三好市、南部は海部郡、そして中部是那賀町での泊まり込みの実習を経験しています。しか

し、それでも6年間の大学生活において徳島という地域の自然や人々と触れ合う機会はまだまだ十分とは言えません。徳島大学で6年間の大学生活をおくるといって、これはきつと誰かが結び付けてくれた縁ではないでしょうか。ぜひ、地域医療サークル活動などの自主的活動を通して多くの医学生に徳島という土地に馴染みを持ってもらいたいものです。それが未来の徳島の医療を支える人材確保へつなげる必要条件ではないでしょうか。



歯学部  
子供の虫歯予防にはみがき教室  
歯科学研究会部長  
歯学部歯学科4年  
杉本明日菜  
私たち歯科は、歯学科・口腔保健学科の学生30名ほどのサークルです。主な活動として、年に2〜3回、幼稚園や保育園を訪問し子供たちに歯みがきを指導する「はみがき教室」を行っています。また大学祭では一般の方を対象に、歯みがき教室を行っています。  
歯みがきの習慣は子どものころに身につけることが大切です。子供たちに興味を持ってもらえるように、劇で歯みがきの大切さを伝えたり、歯みがきを一緒に楽しく練習したりしています。子どもたちの「歯みがき頑張るー」という元氣な声を聞くと、本当にうれしく思います。また保護者の方にも参加していただき、親子での虫歯予防を目標にしています。  
ボランティアの活動ではありませんが、引率してくださる歯科医師の先生や保護者の方々の意見、子どもとのコミュニケーションなど、学ぶことも多く感謝しています。

## 薬学部

### 地球は大きな薬箱

薬学部附属薬草園の一般開放

薬学部長

### 高石喜久

全国の薬学部には薬草園が設置されており、徳島大学の薬草園は恵まれた規模と設備を有しています。広さは1万平方メートル、栽培している植物は約800種で、漢方薬に使われる薬草、西洋の薬草、絶滅危惧植物、ハーブ類、民間薬などをテーマ別に栽培しています。薬学部では正しい薬草の知識を普及すること、身の回りに有る薬草、植物に親しんで頂くことを目的にして「地球は大きな薬箱」をテーマに、この施設を一般市民に開放しています。一般開放は団体（各種薬草の会、幼稚園、小中学校、公民館活動、老人会、婦人会など）各種団体の依頼）の随時受け入れと春と秋の一般開放（5月と10月それぞれ連続した5日間）の二つの方法で実施しています。団体の規模は20人〜50人程度で、数多くの団体が訪問されます。一方、一般開放は1000人程度の方が毎回訪問されます。薬草園での説明

は薬草園担当技官、生薬学研究室の教員と学生が担当しています。学生さんにも園内にある薬用植物、ハーブ類を一般市民に案内してもらっています。時には学生さんにとっては答えにくい質問が寄せられることもありますがこれは教員が代わり返答します。団体、一般開放を含めて1年間に1500人以上の人が薬草園を訪問され、薬草、自然を楽しまれています。リピーターも多く毎年開放を楽しみにされている人も数多くいます。薬草園では「薬草園友の会」（仮称）を発足させ、会員を募集し地域の人々と共に薬草の勉強を進め「地球は大きな薬箱」を体験して頂く計画もしています。

### 徳島大学地域再生塾

平成18年から徳島大学と那賀町の協定に基づき、那賀町相生に「徳島大学地域再生塾」（那賀町の好意により塾の事務室、講義室等を貸与されている）を設置し薬学部の高石を塾長とし、工学部、総合科学部の先生・学生さんと地域住民を塾生として活動しています。これまでに地域特産品の発掘、文化の掘り起こし、丹生谷応援団の活動、なかなか市の開催等を活発に進めており、「徳島大学地域再生塾」の名前は地域に充分浸透しています。また、工学部の山中研究室の学

## 学生パワーが地域を変える



この活動をこれからもずっと続けていきたいです。

生さん、山中先生、真田先生等も活発に活動してくれています。大学が現場に拠点を確保し塾生と共に地域の再生を考え、実行するこのスタイルは大学の地域貢献の一つのモデルケースだとも私自身は考えています。

### 補完代替療法室・おくすり相談室

徳島大学病院内に設置されている「補完代替療法室・おくすり相談室」で薬学部教員4名が病院内の患者さんの相談（民間薬・漢方・健康食品、一般薬、妊婦と薬に応じています。種々のご相談があるのですが、時間をかけ丁寧に対応することを心がけています。



2010年10月に開催した薬草園秋の一般開放で薬草を観察する人達

## 工学部

### 北村征也

大学院先端技術科学教育部  
建設創造システム工学コース  
博士前期課程 1年

私の所属する都市デザイン研究室の学生は、月1回ほどのペースで、那賀町で行われている徳島大学地域再生塾に参加しています。地域再生塾は、平成18年8月に徳島大学と那賀町が交わした地域再生をテーマとする連携協定により、那賀町延野に設けられた拠点を中心に展開されています。そこで私たちは、話し合いの内容のまとめや、他の地域で行われている地域おこし事業の紹介など話し合いのお手伝いをさせていただいています。また、これまでも研究室の先輩たちが、水崎廻りのマップ作成などの取り組みにも参加してきました。そして、現在のテーマには、「かきませ」という那賀町の家庭料理を取り上げています。  
この「かきませ」とは俗に言うちらし寿司のことなのですが、一般的なちらし寿司とは違う点があります。それはお酢に、一般的に使わ

# 徳島大学での 新型インフルエンザ 流行経過と今年の傾向

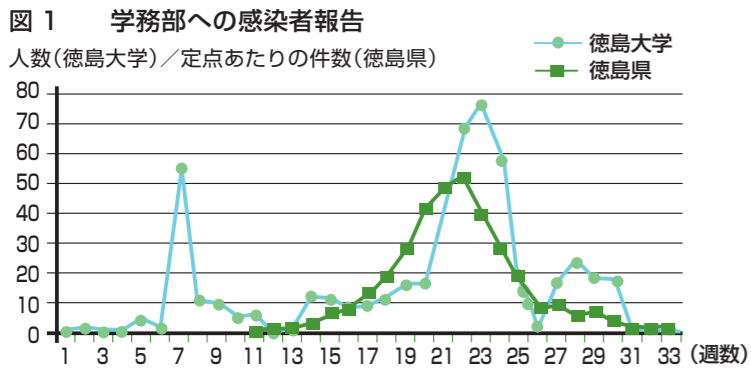
保健管理センター所長 前田 健一

平成21年8月には阿波踊りに参加した学生連を中心に80名を超す集団感染が発生しました。その後一時期流行は治まりましたが、同10月より徳島県内の流行状況に一致するようになり、流行が拡大し、同12月初旬には流行がピークとなり、1週間程度75名ほどの感染報告がありました。その後徐々に感染報告数は低下し、平成22年2月13日の報告を最後に終息しました(図1)。最終的には総計で学生500名、職員50名を超す感染者の報告がありました。職員よりも学生に感染者が多く、また職員でも20代から30代の若い世代に感染者が多い傾向が認められました。この数字から計算した徳島大学の感染率は学生6.6%、職員2.0%です。感染者全員が、大学に

感染を報告していないとしても大学内でも未感染者が大多数を占める状況に変わりはありません。今年も新型インフルエンザの流行があればまた、多数の感染者を出す可能性が高いと思われます。

■今年の流行とワクチン  
今年はずでにA香港型(A/H3N2)から始まり、今は、新型インフルエンザ(A/H1N1)に移行しているようです。今年のワクチンには、A香港型、新型、及びB型の3種類が含まれています。新型インフルエンザが発生するまでは、Aノド型のインフルエンザも流行していましたが、新型インフルエンザの発生により徐々に消滅したようです。今年も保健管理センターでは予防接種を実施し、約1700名の申し込みを受け付けました。昨

年は新型インフルエンザのワクチンの不足で、予防接種を受けられなかった方も多いと思います。今回の新型インフルエンザは弱毒性で、日本での死亡率は0.16%と季節性インフルエンザより低かったとの報告があります。流行の第二波の方が重症度や死亡率が高くなることもあります。またA香港型は重症感が強く、秋田市の病院で8名がなくなるなどの事例も起きています。この4年ほどA香港型の流行がなかったこともあり、免疫が低下している可能性もあります。こうした意味でも、今年予防接種を受けることは、例年以上に重要だと思えます。ワクチン接種はインフルエンザ対策として最も有効な方法です。ただしその効果は感染した場合に重症化をふせぐことであり、感染予防効果についてはあまりないということです。感染予防のためにはあくま



特集 徳島大学の地域貢献  
学生パワーが  
地域を変える



普段の話し合いは、雑談も交えながらの和やかな雰囲気で行われます。塾生の方たちはとても活き活きとした表情で話し合いをされていて、自分たちの住んでいる那賀町が本当に好きなのだと感じ

現在、地域再生塾では、木頭ゆずの販売促進、ひいては地域の活性化を目指しています。そのために家庭料理である「かきませ」を広めていき、世間ではまだあまり知られていない「ゆず酢」の存在と、その使いやすさをアピールし売り出すところになっています。

れている米酢ではなく、那賀町丹生谷地区で採れた木頭ゆずを手絞りにした「ゆず酢」というものを使っているという点です。そして、とても具沢山で、具材には旬の山菜や野菜が使われています。このように季節によって入っている具が違ってくるのも特徴です。また、各家庭で入れる具材や調味料の配分が異なりそれぞれ全く味が違うという点ももちろん、まさにそれぞれのお家の「おふくろの味」と言えるのではないかと思います。その中でも私のお気に入りの具材は落花生で、「ちりし寿司に落花生を入れて」とはじめは思ったのですが、入れることによって程よい感じに味に変化がついて、どんどん箸が進みました。

させられます。また、そのような塾生の方たちのパワーに影響され、私たちもやりがいを感じながら協力させていただいています。そして現在、地域再生塾に参加している経験を活かして、将来就職してまちづくりに携わる機会があれば、このような地域の人たちの地域愛を尊重したまちづくりを心掛けようと思います。

## 大学開放実践センター

とくしまマラソン  
「走る阿呆を支える力に・・・」

大学開放実践センター 教授  
田中 俊夫

今やすっかり徳島の春の一大イベントに成長したとくしまマラソン。7000人のランナーが吉野川河畔を走り、多くの応援者が沿道に並びます。しかしマラソン大会は多数のボランティアの存在なくしては成立しません。そしてこのとくしまマラソンにも大学開放実践センターの教員と公開講座の受講生が大切な役割を果たしています。

制限時間7時間のとくしまマラソンは平成20年4月27日に第1回大会が開催されました。最近の市民マラソン大会は制限時間を緩和、多少歩いてもゴールできる初心者対応型に変わりつつあります。気軽に挑戦できるといふことでフルマラソン参加者が一気に増えました。

ただ、とくしまマラソンは企画も運営もゼロからのスタート。そこで平成14年以來「1000から始める



フルマラソン」として公開講座「ホテルマラソンを走ろう」を開講してきた大学開放実践センターに協力依頼がありました。そして教員と公開講座受講生が中心となって初心者ランナーの立場から意見交換会を開催し、運営の参考にしていただきました。

レースのボランティアとして協力したのは以下の3公開講座です。「ホテルマラソンを走ろう」の受講生が4時間から6時間30分までの6グループのペースメーカーを務め、多数のランナーをゴールに導きました。ペースメーカーは設定ペースで走るだけでなく、途中にストレッチを入れたり、ランナーを励ます役割も果たします。

「空海と歩こう」受講生はお遍路の白衣姿でお接待エイドを提供しました。ここでは鳴門金時やちみつレモン、お菓子などのお接待と「完走結願ステッカー」を初心者ランナーに配布しました。遍路衣装は四国らしさをランナーに実感してもらえたはずですが、そして「運動でヘルスアップ」受講生はゴール地点で「完走ばんざい隊」として



選手のゴールを共に祝福しました。おそらくこれは全国のマラソン大会でも初めての演出。家族や仲間と一緒にゴールする予定でもそうならないケースの方が多いためです。一人一人がゴールするランナーを大勢で囲んで完走を祝福するというばんざい隊はランナーからの評価も高く、とくしまマラソンならではの名物となりました。

こうした受講生たちの協力があり、センターは第1回大会以来3年連続、実行委員長である飯泉知事より感謝状をいただいています。今年3月20日開催、ランナーの鼓動とボランティアのハートで徳島の春が一段と熱くなるはずですよ。

でも手洗い・うがいをし、流行時には人混みを避けることが基本です。

